

キャラクター名
飛電 竜也 (ひでん たつや)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ キュマイラ		ワークス	高校生	カヴァー	高校生
	オプション		年齢	17	性別	男性
覚醒	憤怒	衝動	闘争	初期侵食率	36	%
出自	義理の両親	経験	永劫の別れ	邂逅	忘却	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	35
肉体	5	1	1			7	行動値	3
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	3
精神	1	0	0			1	戦闘移動	8
社会	1	0	0			1	全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	4		射撃			RC	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志	1		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
特殊装甲義肢	白兵	8r+4	3	6		<白兵>の判定ダイス+1個する。
サイバーアーム	白兵	7r+4	5	Lv+3		
		0				
マグネティックストームブラストファイバー	白兵	11r+4		28		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
コネ: 噂好きの友人	
プログライズキー&変身ベルト	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
秘密兵器	P	N		
義理の両親	P 尊敬	N 隔意		
記憶の彼方にある何か...	P 執着	N 憎悪		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 2 残り財産P: 1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
C:ブラックドッグ	3	2	メジャー	-	-	-	-	
効果: C値-Lvする(下限値7まで)。								
アームズリンク	3	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果: 判定ダイス+Lv個する。								
ハンティングスタイル	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 戦闘移動を行なう。この移動では離脱を行える。移動中にエンゲージに接触しても移動を終える必要もなく、封鎖の影響も受けない。1シーンLv回まで使用できる。								
サイバーアーム	2	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果: 素手のデータを変更する。								
ライトニングリンク	3	4	メジャー	武器	-	対決		
効果: 前提条件: アームズリンク。攻撃力+[Lv×4]する。ただし、あなたは5点のHPを失う。								
鋭敏感覚	1							
効果:								
獣の直感	1							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

名前: 飛電 竜也 年齢: 17 性別: 男性 身長: 175 体重: 72 職業: 高校生
 親族: 幼い頃に両親を事故で失った、現在は親戚が養子として引き取り義理の両親として育てられた。

経緯
 飛電竜也は事故で奇跡的な生還をしたのが彼だ。それは機械人形の暴走によるモノで引き起った暴走事故らしい。どうして、生き残れたかどうして事故が起きてしまったかについては真相は不明となり事故は何事もなかったかのように収束していった。その事を知る人物も興味を示す者も居なくなったのは彼が高校に入学した頃である。本人も何が起ったのか記憶はなく、どうして生きているかもある種の謎として一時期は報道関係者が殺到したくらいに時の人となった事もある。それが彼の知りえる情報だ。(報道関係者Cによる情報提供)

俺は幼少期に両親を失ったそうだ... それについての記憶もなくどうしてそうなったかも分からない。それ以降から悪夢を見るようになった。何処も分からない場所で大勢の人間が殺されている中で、俺だけがポツンと生き延びている... そして、何とも言えないが化け物のようなモノに襲われそうになった時に誰かが俺の前に立って庇って犠牲になる... その人は最後にいつも「...生きて...」と優しい表情で言ってくれて、最後に何か黒い感情に飲み込まれ意識がそこで途切れる。それを毎日毎晩見ている。